

### コロナ禍を経て更新された日本語教員の役割観

—「お世話係」、境界性を持った存在，そして教員として—

松本明香

本研究では，コロナ禍前からコロナ禍中の現在にかけて行なっている，大学に所属する日本語教員へのライフストーリー・インタビューによるデータから，日本語教員の役割観の変容を捉える。調査協力者は，日本語教育人生の歩み始めに「言語教師は地位が低い」という言葉をかけられ，以来日本語教育や留学生は社会的にいいイメージではないと感じながら日本語教育に携わってきた。非常勤教員を約15年経験した後，現在の所属大学に専任の日本語教員として勤め，コロナ禍での教育実践を経験した。語りからは，①葛藤しつつも「(日本語教員の役割は)お世話係」という言説への独自の意味づけ，②「境界性」を持つ存在として，留学生側と大学運営側双方への働きかけ，③日本語教員の役割に留まらない一教員としての役割の意味を確認し，これらから日本語教員は日本語教員以外の他者との相互行為を通して自身の日本語教員の役割観を更新していると考えた。

(東京立正短期大学)

## 海外派遣教師はどのようにコロナ禍での活動に向き合っていくのか

ーロシア派遣教師の場合ー

神代寿美枝・中川愛理・大政美南

本研究では、日露青年交流センターの日本語派遣教師たちがコロナ禍でどのように活動に向き合っていたのか、インタビュー調査を基に明らかにした。調査協力者 3 名に対し、COVID-19 感染拡大時の心境や現在の活動の状況について半構造化インタビューを行い、【日本語指導】【帰国の判断】【活動のモチベーション】の観点から分析した。その結果、次の 7 つの葛藤が見られた。学習者の様子が分からないこと、ツールの選択、帰国の判断、情報収集、ロックダウン中の活動、活動制限、学生の学習意欲の変化という葛藤である。教師により任地や大学の状況、事情が異なったため、上記のような葛藤を抱きながらも、自分で考え対処していく必要があった。派遣機関は情報や悩みの共有ができる場の提供、派遣教師の判断に合わせた支援をすることで、派遣教師の葛藤への対処が支援できると思われる。

（神代ー横浜国立大学大学院生，中川ーフリーランス，大政ー東京学芸大学大学院生）

## 日本で就労・生活している人たちの「生の声」を聞くインタビュー活動

—「特定技能制度による来日希望者のための日本語教授法研修」における試み—

菊岡由夏・築島史恵・山本実佳・岩本雅子

本発表では，特定技能制度の送出し機関等の教師らを対象に行っている教師研修で，彼らが日本で就労している元学生や知人に行ったインタビュー活動について報告する。活動では①教師が元学生らの生活や就労におけるコミュニケーションの現状について聞き取りを行い，②その結果を共有し現状と課題について理解を深め，③課題を解決するために教授活動を見直すディスカッションを行った。

聞き取りで得られた結果は先行研究と大きく異なるものではなかったが，その後のディスカッションでは，教科書を終わらせることに専心してきたカリキュラムの見直しや異文化コミュニケーションの取り上げ方，日本での受け入れ機関との連携の必要性などが言及された。本発表でこの内容を共有することで，これまで海外の現場と来日後の現場で各々が考えてきたことを来日希望者の視点でつなげるために，両者がどのような情報共有や連携をすべきかを考える機会を提供したい。

（菊岡・山本・岩本—国際交流基金，築島—東京国際外語学院）

## 発ビジネス現場で日本語教育プログラムの受注時に求められる日本語教師の資質

ボイクマン総子・札幌寛子・徳永あかね・大河原尚・鈴木秀明・松下達彦

筆者らは日本語教育プログラム(JP)を立ち上げるプロセスを明らかにする研究の一環として、企業向けの日本語教育事業を継続的に展開する教育機関 A の日本語教師 1 名と、機関 B で JP の企画や教師の手配を行う職員 1 名に、各約 2 時間の半構造化インタビューを行い、日本語教師がその専門知識や経験を生かしてどのように JP の立ち上げに貢献できるかをあぶりだすこととした。その結果、日本語教師に求められる知識や業務スキルとして共通する 8 要素を抽出した。これらの要素から、企業向け JP の企画・運営においては、1) 日本語の教え方といった日本語教育の専門的な知識よりも企業のニーズを把握しプログラムを企画する力が求められる、2) 企業側との意思疎通を円滑にするには日本語教育の専門用語を用いない、3) 日本語教育現場の実践を俯瞰的に把握し、プログラム開発の全体像と具体像が描けることが担当者の資質として求められることがわかった。

(ボイクマン総子—東京大学，札幌寛子—国際高等専門学校，徳永あかね—神田外語大学，大河原尚—大東文化大学，  
鈴木秀明—目白大学，松下達彦—東京大学)

## 作文評価のための教師用ルーブリックの作成と試用

伊集院郁子・李在鎬・小森和子・高野愛子・野口裕之

本発表では、アカデミック・ライティングの評価に資する目的でルーブリックを開発し、試用した結果を報告する。本ルーブリックは、大学教員による作文評価の結果に基づいて開発した点に特徴がある。日本語教員 9 名が 6 編の作文に対して包括的評価とルーブリック評価を行った結果を分析したところ、評価観点の 6 項目（「内容：主張，根拠，論理構成」「言語：正確さ，適切さ」「形式：書式」）のうち、「形式」以外は評価者間の内的整合性が高いことが確認された。「形式」は、指定された文字数よりどの程度少ない場合に「悪い」と判断すべきか、共通した基準がないために評価が分かれる結果となった。また、ルーブリック評価と包括的評価の評点を比較したところ、高評価の作文はほぼ一致しているのに対し、中～低評価の作文はルーブリック評価の方が高いことがわかった。今後、評価基準などの調整を行い、作文教育支援ツールの一つとして公開する予定である。

（伊集院—東京外国語大学，李—早稲田大学，小森—明治大学，高野—大東文化大学，野口—名古屋大学）

## SPOT テストの項目の特徴

—中国語を母語とする日本語学習者の場合—

黄叢叢・呉梅

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者の総合的な日本語力を測定するために、SPOT (Simple Performance-Oriented Test) ver. 2 はどの項目が有効であるかについて検討したものである。157 名の中国語を母語とする日本語学習者の得点を分析した結果、SPOT ver. 2 において識別力の高い 12 項目、識別力の低い 11 項目を抽出した。抽出結果を分析したところ、中国語を母語とする日本語学習者にとって、識別力の高い項目の特徴としては、(1) 複文の主節ではなく、言語分析にはより認知資源がかかる従属節の場合 (2) 学習者にとって馴染みのない用法 (3) 語用論的な問題 (4) 音声的な問題、子音が続く場合 (5) その他 (発達順序、口頭表現 (縮約形))、などが挙げられる。一方、中国語を母語とする日本語学習者にとって、識別力の低い項目の特徴としては、(1) 学習時期が早く、学習者にとって馴染みのある用法 (2) 機能語の類 (3) 語種の影響、などであることがわかった。

(黄・呉一明治大学大学院生)

## オンライン講座を活用した日本語発音学習の効果検証

戸田貴子・大久保雅子・千仙永

本研究は，オンライン講座を活用して日本語発音を学んだ学習者の発音が日本語母語話者にどう評価されるのかを調査し，オンライン講座の効果検証を行うことを目的としている。グローバル MOOCs の Japanese Pronunciation for Communication（以下 JPC）を受講した中国語母語話者 10 名（初級 5 名，上級 5 名），ベトナム語母語話者 10 名（初級 5 名，上級 5 名），フランス語母語話者 10 名（初級 10 名）の合計 30 名を対象として調査を行った。受講前と受講後の学習者の音声ファイルを日本語母語話者 30 名が 6 段階評価を行った。

母語別に分析した結果，JPC 受講後に発音評価が上がったことが明らかになった。この結果から，母語を問わず学習者はオンライン講座を活用して発音を学習し，発音調整を行ったことが示唆された。また，レベル別に分析した結果，JPC 受講後に発音評価が上がったことが明らかになった。この結果から，初級，上級ともに学習者は発音調整が可能であることが示唆された。

（戸田一早稲田大学，大久保・千一東京大学）

## 理系大学院留学生を対象とした初級日本語のコースデザインと教材開発

—アカデミックな環境での日常生活で求められるコミュニケーション場面に着目して—

深川美帆・高島智美・多胡夏純・筒井昌子

研究や学業は基本的に英語で行うが，日常生活を日本語で遂行する必要がある日本国内の大学で学ぶ理系大学院留学生を対象とした初級日本語教材を開発した。開発に際しては，理系大学院留学生に特有の学習目的，学習環境を探るためのニーズ調査と，学習者と学習者の身近な日本人に対する行動目的調査を行い，それらをもとに学習者にとって必要度の高い場面・機能を抽出し，Can-do statements による学習目標を設定した。この教材を 2019 年度の日本語コースで試用し，学習者が到達目標に達しているかをパフォーマンス評価で測った結果，全員が目標を遂行できた。また，学期終了時の質問紙調査では，取り上げた場面・機能の全てに「役に立つ」と回答があり，その半分については 6 割以上の学生が「実際に遭遇した」と回答していること，コースに対する満足度が 90%以上と高いことから，学習者のニーズを捉えた学習が実現できたことが確認された。

（深川・高島・筒井—金沢大学国際機構，多胡—金沢龍谷高等学校）



## 外国人集住地域における南米ルーツの子どもたちの〈聴く〉力

伊澤明香・井村美穂

本発表の目的は、外国人集住地域における南米ルーツの子どもたちが教科学習に必要な〈聴く〉力がどれくらいあるのかを JSL 対話型アセスメント DLA〈聴く〉(文部科学省，2014)を通して明らかにすることである。外国人集住地域に限定した聴解力調査は、管見の限り少なく、櫻井(2018)で指摘されるように実証研究を蓄積していく必要がある。2018 年 12 月，2019 年 12 月，2021 年 3 月，5 月に外国人集住地域の学習支援教室に通う南米ルーツの子どもたちを対象に 62 本のデータを収集した。ステージ判定の結果，ある程度の支援が必要な段階の者が 32 名と半数を超えた。滞日期間の平均は 7 年，6 割が日本生まれ日本育ちで公立学校に通っているにもかかわらず，〈聴く〉力は日常生活のことは理解できるが，教科学習に関する談話を〈聴く〉力までは至っていないことが明らかになった。

(伊澤—大阪経済法科大学，井村—子どもの国)

## 外国にルーツを持つ子どもの学習支援

—兵庫県三田市の子どもたちへの調査からみえる現状と課題—

柳川瀬真衣

外国にルーツを持つ子どもの数は年々増加しており，彼らへの教育支援は重要な課題である。本研究では，兵庫県三田市国際交流協会子どもにほんご教室 SKIP に通う外国にルーツを持つ子ども 9 人にインタビュー調査を行い，キーワードを抽出して作成した概念間の関連図を分析し，外国にルーツを持つ子どもを取り巻く問題の全体像，問題の発生要因とその関連性，及びその背景を考察した。その結果，学校における教育課題として，外国にルーツを持つ子どもへのサポートの少なさがあると分かった。この課題の要因は，母語によるサポート時間の少なさ，日本語指導実施にばらつきがあること，教科学習支援が実施されていないことの 3 つである。他方，SKIP は日本語指導，教科学習支援を実施しており，学校ができない支援を行っている。子どもへのインタビューから，SKIP のマンツーマン指導が有用であることと，SKIP が子どもにとって居場所となっていることが分かった。

（関西学院大学大学院生）

## ベトナム人初級学習者を対象とした内容言語統合型学習（CLIL）の試み

—オンラインによる総合日本語授業の実践から—

神村初美

本発表は、ベトナムの大学の初級レベルを対象とし、ベトナム事情を扱った総合日本語の授業で行ったオンラインによる CLIL 授業の実践報告である。教師による省察的実践の視点から分析することによって、初級レベルに CLIL を用いる有効性、支援策、課題について共有することを目的とする。分析の結果、ベトナム事情につき俯瞰的な視点で捉える、未習語彙や表現の獲得、能動的な学習者育成の機会に繋がっていたことが分かった。閲覧サイトの情報を直引用の発表から、自分なりの解釈と使用語彙による発表への発信姿勢の変化が見られた。さらに、初級レベルに CLIL を用いる場合の一つのスクリーンホールディングとして、収集した情報の整理の仕方、整理した情報の伝え方への支援が必要であることが分かった。一方、初級学習者にとって難解な語彙や表現が頻出する CLIL での発表の場において、いかに聞き手側への認知的負担の軽減を図るのが課題となった。

(ハノイ工業大学)

## 初級クラスにおける CLIL（内容言語統合型学習）要素を取り入れた授業の試み

山田真弓

初級前半レベルの学習者を対象とした CLIL 型授業の実施概要および結果について報告する。テーマは富士山を中心とした世界遺産で、以下の活動を行った。①日本の世界遺産の動画を見る，②読み物を読み，質問を作成し，回答する，③登頂の際の服装について考える，④入山料について話し合う，⑤総括プロジェクトとして国の世界遺産について発表する。語学教育の一環として行う Soft CLIL で行ったが，初級前半であっても，簡単な語彙，表現，文法を使って，テーマに結びつけた言語活動を行うことができた。顕著に表れた成果は学習意欲とアウトプット力の向上である。CLIL 型授業には2つのスキヤフォールディング，①教師が行う支援や方向付けなどをする足場作り，②学習者同士で足場をかけ合う協働学習が重要である。内容学習と言語学習の比重は1：3であったが，内容と言語とのバランスをどう取るのがいいのか，内容学習の比重をいかに高めるかが今後の課題である。

（東京都立大学）

## 複合和製英語データベースの構築と応用

呉梅

「オールバック」のように日本人が独自に作った和製英語は，日本の日常生活でよく見かけ日本語学習者にとっても学習する必要があると考えられる。和製英語に関する先行研究を概観すると，語構成の分類，意味理解の状況から検討したものがあある。しかし，日本語学習に利用可能であるという要因からの分類はまだ行われておらず，和製英語を量的にも分類されていない。そこで，本研究は，和製英語のうち数が一番多い複合和製英語をまず取り上げデータベース構築する。

具体的には国語辞書・外来語辞書の四つの辞書から複合和製英語を 1772 語に絞った。意味，品詞，中国語の相当語の有無，難易度，使用頻度，前後語の品詞，前後語の難易度などの項目からなる。本研究で構築したデータベースは研究者・指導者・学習者が直接利用できる。多様な視点から数量的に和製英語を分析した資料はこれまでに類を見ないものである。

(明治大学大学院生)

アニメに用いられる日本語  
—スクリプト分析による語彙的・文法的特徴の抽出の試み—

山本裕子・小川満梨奈

アニメには日本語教科書や授業では扱われないような俗語や隠語も多く用いられており、バリエーションが豊富である。アニメをそのまま日本語学習の素材として取り入れるなら、いわゆる「教科書からはみ出た部分」も含め、語彙的、文法的特徴を明らかにする必要がある。そこで、本発表では国内外で人気がありジャンルの異なるアニメ 4 作品を対象としてスクリプトをコーパス化し、バリエーションの広がり注目して、語彙的・文法的特徴を抽出することを試みた。分析の結果、どのアニメにおいても、文法的には非標準的な使い方はほとんどなく、くだけた形は語彙や発音において見られるものであること、くだけた表現だけでなく、敬語のような改まり度の高い表現も含めたバリエーションがキャラクター設定に利用されており、アニメ全体に見られる特徴と、キャラクター設定と結びついた特徴があることが示された。

(山本—愛知淑徳大学・小川—愛知淑徳大学大学院生)

## 中国人日本語学習者による句読点の捉え方

一文末の句点を中心に—

劉梅竹

句読点は文章を作成する上で、重要な役割を持っているが、市販の日本語教科書を調査したところ、句読点の使用方法が提示されているものはほとんどなかった。また、日中両言語の「文」とは概念が異なるため、中国人学習者は句点を使用すべきところで読点を使っている状況がある。したがって、中国人学習者の句読点使用の要因と句読点の捉え方を解明する必要がある。本研究は JLPT の N1 に合格した JFL の中国人日本語学習者を対象として、調査を行った。中国人日本語学習者の作文における句読点の誤用例を用いて文末の句点に焦点をあて、誤用選択と句読点学習に関する質問紙調査を行う。調査後、学習者の認識についてインタビューした。調査の結果によると、中国人学習者は N1 に合格しても、句読点の使い方に戸惑うところがある。日中両言語の「文」とは概念が異なるため、句読点の誤用を生じるということを明らかにした。

(京都外国語大学大学院生)

## 日中接触場面の話し合いにおける「不同意」のストラテジー

— 「事実に対する不同意」と「提案に対する不同意」に注目して—

袁姝

本研究は日中接触場面の話し合いにおける「事実に対する不同意」と「提案に対する不同意」を考察した。大学院生知人同士 4 人 1 組×2 組のオンライン話し合いを録画し、「不同意の対象となる事実/提案話段」「不同意話段」「不同意への反応話段」を抽出して「不同意話段」内のストラテジーを分析した。その結果，事実に対する不同意の場合，参加者は直接的に不同意し，情報伝達の正確性と効率を優先させる一方，提案の場合，参加者は配慮のためより複雑で曖昧なストラテジーを使用する傾向がみられた。また，母語話者のほうが，不同意を暗示する様々な「確認要求」など，多様なストラテジーを使用していることが分かり，学習者との共同構築も観察できた。ただし，「否定寄りの確認要求」の非明示性により学習者が理解できず，不同意の相互理解が達成できなかった例も見つかった。このことから，不同意のストラテジーについて実践指導に新たな提言ができる。

（東京外国語大学大学院生）



## 国際共修クラスにおける葛藤が不満につながるか否かの分岐点

—受講生の否定的語りの有無による比較検討—

藤美帆

本研究は、国際共修に関する将来的な教育的応用を視野に入れた基礎研究である。クラス内での葛藤経験が不満につながるか否かの明暗を分けるものは一体何であろうか。本研究ではそれを受講生の葛藤対処方略に求め、国際共修受講経験のある学部生延べ 42 名の授業での経験に関するインタビューデータを分析した。具体的には、葛藤及び否定的語りの有無によって対象者を 4 群に分類し、計量テキスト分析を用いて各群の語りの特徴を比較検討した。「競合」「協調」「妥協」「譲歩」「回避」で構成される葛藤対処方略の 5 類型に照らし、考察した結果、自己主張性の低い「回避」や「譲歩」の葛藤対処方略をとった者は不満を残し、自己主張性の高い「支配」「協調」「妥協」の方略をとった者は葛藤を学びの機会と捉えていることが明らかとなった。以上の結果から、国際共修においては、グループ内で言いたいことが言い合える関係性や場づくりの重要性が示唆された。

(広島修道大学)

## 双方向型の伝達場面におけるやさしい日本語の一考察

—文法外のやさしさに着目して—

堀美宇

地震等の災害時には、公共施設の館内放送等をはじめとする一方向型の伝達だけでなく、外国人との双方向型の伝達場面でのやさしい日本語の活用が求められている。双方向型の伝達場面では災害の一般的な情報に加えて、相手の文化背景や災害に関する知識、経験への配慮が求められる点で一方向型との違いが見られる。本発表では、外国人の災害に関する知識や経験に配慮したやさしい日本語が、災害時に外国人に危機意識を持たせ避難行動を起こす可能性が高いことに着目し、地震発生時に伝達する情報内容で配慮すべき「文法外のやさしさ」の要素が外国人の災害リスク回避にどのような影響があるのかを整理した。

(岩手大学大学院生)